



## 「献血は命をつなぐボランティア」

山口県立柳井高等学校

2年 <sup>ふかだ</sup> 深田 <sup>かな</sup> 佳菜

「今日は献血の日です。」いつも通りネットニュースを見ていると、このような言葉が目に入ってきた。一九六四年（昭和三十九年）日本政府は「輸血用血液を献血により確保する体制を確立」することを閣議決定。このことをきっかけに、八月二十一日が献血の日と呼ばれるようになったそうだ。当時の日本は、「売血」が盛んで、売血が原因で肝炎の感染が起きるといった状況。そのような中で献血が始まった。当初はわずか二パーセント程度の献血由来の輸血用血液が、わずか十年間で百パーセント国内自給ができるようになったそうである。

このネットニュースを見て、私はふと、自宅に送られてきたハガキのことを思い出した。そのハガキは父宛に送られてきたもので、ハガキの献血キャラクターが記憶に残っていた。そこで、父にハガキのことを聞いてみた。それは献血の案内で、父は大学生の頃から定期的に献血を行っているとのことだった。父が献血を始めたきっかけは、買い物の際、偶然、献血車がいることに気づき、スタッフの人に声をかけられ、献血をしたというものであった。そして、その時、なぜか「すがすがしい気持ち」になり、定期的に意識をして献血を行うようになったそうだ。私は、父の言う「すがすがしい気持ち」とは、なんだろうと考えた。そのような時、山口県知事からの「中学生、高校生、高等専門学校生の皆さんへ」というメッセージを目にした。「あなたも是非、献血インフルエンサーになってください。」という題名のメッセージを読んだとき、私は父の言う「すがすがしい気持ち」とは何が少しわかるような気がした。いつでも、どこでも、誰でもできるボランティア、社会貢献の一つが献血ではないかと。それも小さなボランティアで「命をつなぐ」という大きな貢献のできるものである。だからすがすがしい気持ちになれるのではないかと。そのメッセージの中には、一〇代～三〇代の献血割合が全国と比べて低い事が書かれていた。また、先日、コロナ禍が影響して献血の量が減っているというニュースを耳にした。心配である。

献血が始まり、約十年間で百パーセントの自給率を達成した日本。人々の温かい気持ちの力はすごいと思う。今回、ネットニュースから偶然「献血」について知ることができた。山口市野田の献血ルーム「For You」についても献血のハガキから知ることができた。「知る」ということは大切だ。今はコロナ禍で不自由だ。以前はあったボランティアの機会も少なくなっている。「時期が悪いからできない」ではなく、今できることを私たちは見つけていかななくてはいけないのではないだろうか。私も十六才になった。大人にどんどん近づいている。「命をつなぐボランティア」に参加してみたい。そして、父のような「すがすがしい気持ち」を味わいたい。



# 「命を繋ぐボランティア」

柳井学園高等学校

3年 福田 彩乃

私は先日、初めて献血をした。きっかけは、学校に献血バスが来たからだ。以前から、献血に興味を持っていた私は、すぐに献血をしようと決意した。しかし、献血はやりたい人が必ず出来るわけではなかった。

献血をするには、いくつかの条件を満たしておく必要がある。その条件には、年齢や体重、渡航歴などがある。そして、献血直前にもまだまだ具体的な条件があった。私は、こんなに条件があることを知らなかった。幸い私は、この条件を全て満たしていたため、献血をすることができた。中には、条件を満たせず献血できずに帰る生徒を、何人か見かけた。「なぜ、こんなにもたくさんの条件を作り、献血する人を制限するのだろうか。せっかく協力しようとしているのに。」私はそう思った。しかし、これにはきちんと理由があるのだ。献血をする人も、輸血を受ける人も皆『人間』だ。それぞれが健康に生きていく必要がある。たくさん条件があるのは、それぞれの健康を守るためだからだ。献血をしようとしている人の中には、貧血気味の人もあるだろう。元々血液が少ない人が献血をするとどうなるのか。その人自身の健康を損ねてしまう可能性がある。他にも、限られた期間の中で複数人と性行為を行った人も献血はできない。性感染症のリスクがあるからだろう。このように、さまざまな条件がある背景には、人々の健康を守ることがあるのだと思う。

では、献血をしたいけど条件がわからない人や、条件を満たせない可能性のある人はどうすればいいのか。答えは簡単である。献血ルームやバスの訪問先に行けば良いのだ。初めは皆、不安だろう。私も、実際不安だった。しかし、職員の方が丁寧に教えてくれるし、質問にも答えてくれる。職員の方は常に笑顔で明るいので、注射をするまでには不安も自然となくなっていた。例え、条件を満たせず献血が出来なかったとしても、恥ずかしいことではない。「献血をしてみようかな。」少しでも、そう思えることが大切なのだ。これから先、高齢化が進み輸血を必要とする人が増えるだろう。最初は怖いかもしれない。注射が苦手な人もたくさんいると思う。しかし、少し勇気を出してみたい。その勇気で救える命が、繋がる笑顔がたくさんあるのだ。まずは、献血について知ることからでもいい。そうすれば、献血に興味湧いてくるはずだ。興味湧けば、献血ルームやバスの訪問先にも行きやすくなるだろう。とにかく、献血に興味を持ち、少しでも協力しようと思う気持ちが大切なのだ。

このように、献血にはたくさんの条件がある。しかし、それと同じだけ、もしくはそれ以上に、血液を必要としている人がいる。そして、その患者さんの帰りを待つ家族、友人がいる。その人達のためにも、ぜひ、献血に協力してほしい。献血は、誰にでも出来るボランティアだから。



# 「人から人への命綱」

山口県立熊毛南高等学校

3年 たてばたけ あんり 立 畠 杏 莉

「また今度挑戦してね。」正直、とても悔しかった。十六歳になったら私も献血をしよう、以前からそう決めていた。私の通っている学校では、文化祭前になると毎年献血バスが来て、献血に協力している。献血する当日、私も体調を万全に整え、バスの中に足を踏み入れた。しかし、私は僅かだが採血できる基準を満たしておらず、献血ができなかった。

五年前のある日の買い物帰り、駐車場に献血バスが止まっており、たまたま近くの掲示板を目にした。輸血用血液が不足しており、苦しんでいる患者さんがいる、という内容だった。驚いた。今まで献血は目にする程度の認識だったが、詳しく知りたいと興味を持った。顔も名も分からない誰かの尊い命。私が献血をする事で少しでも命を繋げられるのならば——。その日から献血をしようと強く志願するようになった。

献血。それは、病気や怪我の治療で輸血が必要な患者さんの為に、健康な血液を無償で提供するものだ。輸血用の血液は、人工的に造られておらず、全てを献血で補っている。また、長期保存も現段階では不可能なのだ。さらに輸血を何度も受けた患者さんは、適合する血液を探すのが困難だったり成分輸血が必要になったりする。献血と聞くと、赤い血液を提供する印象が強いが、必要な一部成分を提供する場合もあるのだ。私は初めて知った。より多量の血液が、日々必要不可欠とされている理由が分かった気がする。それだけではない。献血をするまでには、体重や血圧、服用薬、ヘモグロビン量など様々な基準を満たす必要があるのだ。看護師さんから「また今度挑戦してね。」と私のように声掛けされ、献血を諦めざるを得ない人がきっとこれまでも沢山いたのだろう。

献血はできないが、私にも何か取り組める事はないだろうか。考えた結論が、より多くの人に献血のしくみや重要性について知ってもらおう事だった。そして今、この献血推進作文を書くに至った。健康な血液を命の為に必要不可欠としている人が日々いること、献血に協力したくてもできない人がいること、献血によって多くの命が繋がられていること。現在、新型コロナウイルスの感染拡大で献血をする人が減少し、ますます血液不足に陥っている。輸血用血液の需要量が献血による血液供給量を大幅に上回る可能性の統計も出ており、このままでは救えていた命も救えなくなってしまう。献血は勇気がいる行為かもそれない。しかし、その勇気や親切心で今日も誰かの命が繋がっている事実を頭に入れておきたい。また、人にも伝えていきたい。

私は将来、医療の現場に携わる仕事を目指している。今は、献血の重要性を周囲の人達に伝える事くらいしかできない。だが、知ってくれた人が少しでも献血に興味を示し、挑戦してくれれば私は嬉しいと思っている。顔も名も知らない、誰かの尊い命を守っていけるように。



# 「助け合いの献血」

山陽小野田市立埴生中学校

2年 よねだ 米田 ひなか 陽菜香

献血は大切である。そう考えたのは中学生になって初めての夏だった。きっかけは家族で行ったショッピングモール。入ってすぐの場所にて、ある一人の大人から声をかけられた。

「献血のご協力お願いします！」

私は困った。献血に対する知識が無かったのだ。家に帰った私は、今回を機に献血について調べることにした。

まず、献血とは何を表すのだろうか。調べてみると、献血とは病気の治療や手術などで輸血を必要とする患者の「命を救う」ための活動だそう。その血液は、健康な人が自らの血液を無償で提供するボランティアが主体のようだ。

では、なぜ献血は必要なのだろうか。答えはこうだ。輸血に使用する血液は未だ人工的に造ることができず、長期保存することもできないから。そのため、輸血等に必要血液を確保するためには、一時的に偏ることなく一日あたり約一万三千人の献血に対する協力が必要なのだ。

また、日本国内では少子高齢化により、主に輸血を必要とする高齢者が続出し、若い世代が減少している。十～三十代の献血協力者数はこの十年間で三十五パーセントも減少。つまり、少子高齢化がますます進むと血液の安定供給に支障をきたす恐れがあるのだ。これらのことから分かるように、今後も患者の命をより多く救うためには今まで以上に若い世代の献血に対する理解と協力が必要なのだ。

私が献血について調べるうちに一番驚いたこと。それは、献血に協力できる人に基準があるということだ。具体的な例を挙げると、種類にもよるが、十六歳以上七十歳未満であること。体重が四十キログラム以上。年間六回以内など様々だ。指定された薬の服用、予防接種等を行っている方は献血に協力することができない模様。様々な基準は、きっとより安全な血液であることを保証するためだというふうに捉えることができるだろう。

他にも安全性を考慮するために、一人から多量の献血を行う血液製剤が行われているようだ。人間一人ひとりの血液は、血液型が同じであろうと微妙に異なるため、多数の献血者から輸血するほど副作用発生率の上昇に繋がるのだ。

私は今回献血について調べるうちに、まだまだ知らないことが多数あって驚いた。私自身、献血についての大切さがよく分かった。しかし、世間一般ではどうだろう。私の知人に聞く限り、献血への理解は疎か、献血そのものの認識も薄いようだった。より多くの人に理解を深めるためにも、自らが主体となって拡散するべきだと思う。私もいずれ年齢を重ねる中で、再び献血に向き合うことがあるだろう。そのときは、互いが協力し合い、助け合うようになりたいと思う。



# 「献血で変える未来」

柳井学園高等学校

1年 はしもと 橋本 ひびき 響

私たちの体内には、酸素を運び、病原体と戦い、出血を止めてくれる血液が流れています。しかし、この血液は病気や手術、突然の事故による大量出血など様々な原因で失われてしまいます。大量出血をしたあと直ちに輸血しなければ、体に酸素が回らず死に至ります。多くの命を救うために、医療現場には常に大量の血液が必要です。そして、それらを必要とする人に十分に供給するには、私たち若い世代が献血に積極的に参加することが重要なのです。「献血が大切だ」と考える理由が、私には二つあります。

一つ目は、誰かのためだからです。高齢化が進む現代社会で、輸血が必要な高齢者のため、献血に協力する必要があります。病気や事故で必要としている誰かの命を繋ぎとめるために、絶えずできるときに多くの人が献血をすることは、とても大切です。私の父は、市役所に献血車がやって来たときには、必ず献血をしています。昔、一度だけ「どうして献血するの。」と、父に尋ねたことがありました。そのとき、父は「誰かの役に立つかもしれないし、もしその誰かが家族だったとき、一番に助けてあげられるかもしれないからやってるんだよ。」と、父なりの考えを教えて貰いました。私はこのときから、献血できる年になったら、私もやりたいと思うようになりました。献血は皆で協力すれば、誰かを助け、巡り巡りもしものときに自分にとって大切な人の命も救えるかもしれないのです。

二つ目の理由は、自分のためだからです。父の考えを聞いてから、献血は自分のためにもなるのではないかと考えました。もし自分が輸血を必要としたとき、十分な量がなかったら、その場で死んでしまいます。しかし、もし自分を含めた沢山の人が協力すれば、輸血ができ、助かるかもしれません。

血液は、体中を巡る命の源です。けれども、血液にも寿命があり、約百二十日といわれています。そのため、体内では減ったりなくなったりした分を補い、均一になるように働きます。でも、献血として、血液が体の外に出れば、寿命が変わってくるのです。一般的に輸血用血液製剤の全血（全ての血液成分が含まれている）や赤血球といった種類は有効期限が二十一日間といわれています。また、血漿は採血後一年、血小板においては四日間という非常に短い期間しか持ちません。このことから、血液を必要としている誰かのために、献血はより多くの人が続いて血液を提供する必要があります。献血の提供状況は、日本赤十字社のホームページで確認できるようになっています。

献血とは、無償で血液を提供することと定義されています。しかし、その血液は巡り巡って必ず誰かの力になり、もしものときに自分のためになります。皆で献血を積極的に行いましょう。そうすれば、誰もが健康で安心な暮らしができる未来が必ずやってくるのです。



# 「献血との戦い」

柳井学園高等学校

3年 なかむら 中村 こうだい 航大

僕はこの夏、初めて献血をした。僕は何を隠そう、かなりのビビリだ。なぜそんな僕が、献血をしたのかを少し話そうと思う。

初めて、「献血」というものに触れたのは、高校一年生の夏頃だ。外からトラックが来た時のような音が聞こえたので下を見ると、十字のマークに屋根が付いているバスが止まっていた。初めて見るバスで、先生にこの中で献血をすると聞いたのが、献血との出会いだ。そして、それと同時に十八歳で献血が出来るというワクワクと恐怖も味わった。それからあっという間に時間が経ち、学校に献血車が来ているのを見る度に、何とも言えないものが込み上げていた。

三年に進級し、少しした頃だった。急に「献血」という字が頭をよぎった。それから数カ月が経った時、献血の募集があった。先生は「受けたい者だけでいい」と言っていたので、ホッとした自分がいた。しかし、そんなのは束の間。次の日に学校に行くと、みんなやる気満々で、正直どうかしてると思った。僕はお調子者で、すぐに格好をつけたがる。そのせいで、友達から「お前も受けるよな？」と聞かれドキッとしたが、いつもの調子で「もちろん受けるよ」と口走ってしまった。しまったと思ったが、言い変えることも出来ずに、持っていたプリントをすぐに書き変えた。その日の夜から、自分との葛藤が始まった。毎日毎日「痛くない痛くない」「怖くない怖くない」と呪文のように声に出して自分に訴えた。けれども、そんなことで恐怖心がなくなることもなく、ただ時間が過ぎていった。だが、ある日を境に恐怖がなくなった。それは、たまたまテレビで、輸血を百回以上受けてきた人の話を見たからだ。その方は、小さい頃に癌と診断され、何度も輸血をしたという。世の中には、そういった人もいるのに、なぜ自分はただ怖いからという理由で、献血を拒否しようとしていたのかと、自分が馬鹿らしく思えてきたからだ。ただ、恐怖は無くなったが、いつもならしないようなことをし始めた。食器洗いやトイレ掃除など、気が付いたらしていた。他にも、ご飯を食べた後に急に歩きたくなったり、部屋にあるバスケットボールをついたり、とにかく動いてないと落ち着かなかったのだ。そうこうしている内に、とうとう献血の日になった。朝は冷や汗をかいていて、とにかくその日は、また恐怖に襲われた。けれども、もうやると決めていた僕は、こんなところでビビっていてもしかたないと思い、心を決めて学校に向かった。一時間目、二時間目とあっという間に時間が過ぎ、いよいよ僕の順番が近づいてきた。鼓動は高なり、今にも弾けそうになっていた。僕の番になった。献血の針を刺す瞬間は、なるべく針を見ずに深呼吸で挑んだ。もう心臓はバクバクで倒れそうな時に、右耳から「もう打ちましたよ」と看護師さんの声が聞こえた。その時僕は思った。「自分がバカだった」と。献血が終わってからは、何とも言えない晴れやかな気分で達成感にひたり、スッキリした気分だった。そして、次からはもう少しリラックスしてチャレンジしよう、と自分にそう言い聞かせたのだった。